

ウィリアム 1 世とドゥームズデイ = ブック

William I and the Domesday Book

川 瀬 進

目 次

- I はじめに
- II アングロ = サクソン
 - A. キリスト教の布教経緯
 - B. フランク王国のフェダリズム
 - C. ブリテンのフェダリズム
- III ガヴォル (Gafol)
- IV ドゥームズデイ = ブック
- V おわりに

I はじめに

イングランドの歴史は、ノルマンディー王家から始まった。すなわち、ノルマンディー公ギヨーム 2 世が (Duc de Normandie Guillaume II, c. 1027-1087) が、イングランドを征服し、1066 年 12 月 25 日、ウェストミンスター = アベイ (West-minster Abbey) で、戴冠式を行った以降のことである。

イングランド王ウィリアム 1 世 (William I, 1066-1087) は、即位当初から、多難な行政に向き合わなければならなくなっていた。すなわち、イングランド国内外の治安を守るための、戦費の徴収である。

この戦費の徴収を、恒常的に徴収するために、ウィリアム 1 世は、アングロ = サクソン (Anglo-Saxon) 時代から、イングランド国民に徴収されていたガヴォル (Gafol: 現物貢租) を、より組織的に、かつより確実にするために、デインゲルト (Danegeld: 土地課税) という名に変え、より厳格な法律にしなければならなかった。

言い換えると、ウィリアム1世は、戦費をより確実に徴収するために、デインゲルトをより厳格にしたもの、すなわち法的な租税台帳であるドゥームズデイ=ブック (The Domesday Book: 国勢調査簿) を、作成させなければならなかったのである。

なお、デインゲルト、つまりデイン税は、イングランドからデイン人 (the Danes) を、平和的に追い出すための租税である。

このデイン人を排斥するための租税、すなわちデインゲルトという言葉は、アングロ=ノルマン王ウィリアム1世治世以降に使われる言葉であり、それ以前では、使われるべきではない。

もし、歴史家、経済史家が便宜上使用するならば、「アングロ=サクソン年代記 (Anglo-Saxon Chronicles)」によるように、デイン人を追い出すために徴収された課税は、現物貢租ガヴォルと呼ばれなければならない¹⁾。

なお、デイン人を平和的に、イングランドから追い出すための現物貢租ガヴォルの前身は、身代金ワーゲルト (Wergeld: Wergild) である。

デイン人とは、8世紀頃、北欧に住むノルマン人 (the Normans) のうち、イングランドに、侵入、略奪、そして定住、支配しに、やって来た人たちである。

なお、北欧に住むノルマン人は、大陸、特にフランク王国北部に侵入、略奪、そして定住、支配しに、やって来た人たちであった。

ノルマン人は、ゲルマン民族の1派であり、別称ヴァイキング (the Vikings) とも言われる。

北欧、すなわちスカンディナヴィア半島 (Scandinavia Pen.)、およびユトランド半島 (Jutland Pen.) に住むノルマン人 (ヴァイキング) は、居住地、言語、風習、地理的環境の差に基づいて区別するならば、3つの部族に区別される。

1. ノール人 (ノルウェー)
2. スウェード人 (スウェーデン)
3. デイン人 (デンマーク)

このノルマン人（ヴァイキング）は、375年からの、第1次ゲルマン民族の大移動（4～6世紀）に際して、故地に留まっており、ほとんど移動しなかった。移動したのは、375年、トルコ・モンゴル系の遊牧民フン族である。フン族は、勢力拡大のため、東ゴート族を服従した。そして、その圧力を受け西ゴート族が、玉突き状態でローマ領内へと、大規模に移動した。

その後の第2次ゲルマン民族の大移動（8～11世紀）で、ノルマン人（ヴァイキング）は、海路や陸路をつたって南下した。

ノルマン人（ヴァイキング）は、移動に際して、イングランドや大陸に侵入、略奪、征服し、そして支配を行った。その移動の原因は、以下の5つである。

1. 人口の自然増加
2. 長子相続
3. 海洋民族独特の冒険欲
4. 金銀の財宝欲
5. 温暖で肥沃な土地の支配欲

内的環境として、人口の自然増加で、その増加した人口を、十分に食べさせるだけの土地が少なかった。

地理的環境として、ノルマン人（ヴァイキング）の住むスカンディナヴィア半島、およびユトランド半島地域は、長期に亘る厳冬期があり、土地が痩せ、十分な収穫物を得ることができなかった。

また、民族的環境として、氏族制から各地に部族王国が誕生していったスカンディナヴィア半島、およびユトランド半島地域では、民族的に安定時期を迎えていた。

さらに、外的環境として、フランク王国が、安定、そして衰退し始めた時期であった。

このような環境の条件からすると、ヴァイキングの初期の目的が、冒険欲、財宝欲であったにせよ、その後の人口増による要因により、他の地への移住が、必然的になってくる。

すなわち結果に、ノルマン人（ヴァイキング）が生き延びるためには、他に

生活の場を求めることが必要不可欠になっていたのである。

このノルマン人（ヴァイキング）、すなわちイングランドに侵入してきたデイン人は、その後のイングランドの財政に多大な影響を及ぼした。

その影響とは、デイン人から多少なりとも被害を受けないために、地租から徴収したガヴォル、そしてデインゲルトの支払いであった。

このデインゲルトは、やがてイングランド王国の財政にとって、非常に重要な財源ドゥームズデイ＝ブックになっていった。

イングランド王が、このドゥームズデイ＝ブックを、より現実施行させるためには、当然、より法的に組織立った封建国家になっておかなければならない。

逆に考えると、イングランド王のウィリアム1世は、ノルマンディーを含めてヨーロッパ各地で、すでに行き渡っていた土地所有であるフェダリズム（Feudalism：封建制度）を、より法的に強化させることによって、ドゥームズデイ＝ブックを、作成させなければならなかった。

そこで、本稿では、ドゥームズ＝ブックが作成されるまでのイングランド、すなわちアングロ＝サクソン時代でのブリタニア、イングランド、ブリテン²⁾が、なぜデイン人から侵入、略奪されなければならなかったのか。そのデイン人の侵入、略奪に対して、イングランドおよびブリテン内の王は、どのように対処してきたのか、を考察する。

また、ドゥームズデイ＝ブックの前身であるガヴォル、デインゲルトとは、何であるか。このドゥームズデイ＝ブックの課税でもって、ウィリアム1世が、どのようにしてイングランドを、安定させていったか、をも考察する。

さらに、このイングランド王国の財源にとって重要なドゥームズデイ＝ブックが、経済史的な立場から、どのような意義があるのか、をも考察する。

II アングロ＝サクソン

8世紀デイン人は、なぜフランク王国（Royaume des Francs）³⁾の北部、および英国東南部に侵入して来たのであろうか。

この8世紀、すなわちアングロ=サクソン時代前、英国は、ブリタニア (Britannia) といっていた⁴⁾。

このデイン人の侵入経緯には、当然、キリスト教の布教経緯も関係する。

また、このデイン人の侵入経緯は、当然、イングランドのフェダリズムおよびドゥームズデイ=ブックにも大きく関係する。

というのは、このデイン人侵入に対し、要塞、城砦町を築き地方の防衛に当たったのが、ノルマンディーのバロン (Baron: 貴族)、イングランドのアール (Earl: 伯) など、部族組織、氏族組織を形成している地方の有力者たちであり、彼らが、将来の封建貴族の基礎をつくり、フェダリズムを形成させていったからである。

そこで、キリスト教の布教経緯を考えながら、このフランク王国北部およびブリタニア東南部でのフェダリズムの端緒、組織をも考える。

A. キリスト教の布教経緯

このフェダリズムの端緒は、4～5世紀、第1次ゲルマン民族の大移動により、古代ローマ帝国が崩壊し、中世西ヨーロッパ世界が完成した以降である。

第1次ゲルマン民族の大移動のうち、5世紀以降、現在のデンマークやドイツ出身のアングロ=サクソン人 (the Anglo-Saxons) がブリタニア (Britannia) に侵入、略奪、定住、結婚、拡散していった。

具体的には、450～550年にかけて、アングロ=サクソン人が、侵入、定住して行った地域は、サセックス (Sussex)、ウェセックス (Wessex)、エセックス (Essex)、イースト=アングリア (East Anglia)、ノーザンブリア (Northumbria) である。

このブリタニア内のケルト系ローマ=ブリトン人 (the Roman Britons) は、すでにローマの支配下にあった時に、キリスト教徒になっていた。

また、496年頃、フランク王国のローマ時代の名前、ガリア (Gaul) も、キリスト教国になっていた⁵⁾。

アングロ=サクソン人は、キリスト教を信じない、異教徒であった。

そこで、浸入するや否や、異教徒であるアングロ=サクソン人は、徹底的にブリトン人のローマ文化や、キリスト教会を破壊していった。

ここで1つ注意しなければならないことがある。

それは、異教徒であったアングロ=サクソン人が、定住、結婚、拡散するにつれて、ブリトン人の宗教的生活習慣に、影響を受けだしたということである。

というのは、異教徒であるアングロ=サクソン人にとっても、定住、拡散するには、ブリトン人の宗教的生活習慣を採り入れ、社会を安定的に平穩に形成した方が、賢明であったからである。

また、この6世紀に、社会を安定させるために、ワーゲルト (Wergeld: Wergild: 人命金: 身代金) という制度が設けられた⁶⁾。

というのは、6世紀当時、内乱が頻発し、殺された遺族が復讐のために、加害者を殺すということが、良くあったからである。このことを食い止めるために、殺された被害者の遺族に、賠償金として、お金が支払われた、このお金が、ワーゲルトである。

600年頃には、ブリタニア内のアングロ=サクソン人が、ヘプタキー (Heptarchy: アングロ=サクソン7王国: ノーザンブリア、マーシア (Mercia)、イースト=アングリア、エセックス、ケント (Kent)、サセックス、ウェセックス)⁷⁾ と呼ばれる7つの小王国を形成させていった。

だが、このヘプタキー7王国は、各自独立した7つの王国ではなかった。

というのは、このヘプタキー7王国内で、ブリタニアのすべての王ブレドワルド (Bretwalda: 全ブリタニア王) を巡り、戦いが繰り返されたからである。また、強い小王国の王が、ブレトワルドになると、当然、弱い小王国は、強い王国に淘汰されていったからである。

このヘプタキー7王国では、部族組織的に次の4階級が各王国を形成させていた。すなわち、キング (the King: 王)、セイン (the Thanes: 世襲貴族、軍人)、カールス (the Churls: 自由小作農、自由民、兵士)、スラブ (Slaves: 奴隷) である。

この部族組織的な4階級の身分は、次の通りである。

①キング (the King：王)

王は、ある1つの高貴な家系セイン (世襲貴族) の出身者の中から、国家の最高重要機関であるウィタン、あるいはウィテナジモット (the Witan, or the Witenagemot：賢人評議会) で推挙された者のみが選ばれた⁸⁾。

王は、自分の臣下たちに土地と武器を授けた。

王は、ウィタン、あるいはウィテナジモットのメンバーからアドバイスを受け、国事を決定した⁹⁾。例えば、戦争の開始、中止、和平の決定、法律の作成、治安の維持である。

王国が発展、拡大するに連れて、王国内が幾つかの行政区画シャイア (shire：州) に分かれていった。このシャイアは、行政上の単位、特に司法上の単位、つまり司法裁判所の所在地であった。また、このシャイアが、フェダリズムの核であり、シャイアが順調に発展するにつれて、王国内のフェダリズムも順調に発展して行った。

司法上の単位であるシャイアは、幾つかのハンドレッド (hundred：百家族のグループ、兵士百人を供給するグループ) に分かれ、また、このハンドレッドは、幾つかのタン (tun：村) に分かれていった。

②セイン (the Thanes, the Thegns：世襲貴族、領主、軍人)

王の下に、セイン (世襲貴族) がいる。

セインは、王から授けられた広大な土地を所有し、その代償として、王のためにだけ、戦うことを義務としていた。

十分に武装した軍人を擁する領主セインは、領民ケアルル (the Ceorls：カール the Churls)¹⁰⁾ に対し、多量のガヴォル (Gafol：現物貢租)¹¹⁾、あるいは過酷な労働による貢租を、課する権利を持っていた。

この権利を、実行するために、領主セインは、領民ケアルル (カール) の移動、自由を制限した。

セインのうち何人かは、エアルダーマン (the Ealdorman：州太守、総督、11世紀以降アール (Earl：伯)) となり、自分たちのエリア内の裁判長と軍司

令官とを兼ねた総督であった。

このエアルダーマンは、アングロ=サクソン時代の行政上の役人であり、旧王国の1つに相当する一群のシャイアを統括した。

エアルダーマンの下に、行政上の役人シェリフ (sheriff: 州長官) がいる。シェリフは、エアルダーマンがシャイアで行っていた行政上の役割を、徐々に引き継ぎ、シャイアの行政に関して、責任を負った。このシェリフは、王とウイタンあるいはウイテナジモット (賢人評議会) とが協議し、王によって任命された。

③ケアルル (the Ceorls: カール the Churls: 自由な小作農、自由民、兵士) シェリフの下に、ケアルル (カール) がいる。

兵士であり、自由な小作人であったケアルル (カール) は、自分の領主であるセインから、軍事上の保護、裁判や法廷での援助、経済的支援を受けていた。これらの代償、すなわち経済的支援であるわずかばかりの土地の借用により、過酷な地代を支払わなければならなかった。

この地代は、現物貢租であるガヴォルと、強制労働とである¹²⁾。

シャイアの中で、人口の大多数を占めているのが、自由小作農のケアルル (カール) である。ケアルル (カール)、王国の経済基盤を支える重要な労働者である。また、ケアルル (カール) は、領土内の土地について、何か問題が生じた時はいつも、フォルク=ムート (folk moots) と呼ばれる村の人民集会に、出席、解決策を講じなければならなかった。

④スラブ (Slaves: 奴隷)。

ケアルル (カール) の下にスラブがいる。

奴隷は、売買、譲渡された。奴隷は、雄牛8頭分と同じ価値があった。奴隷の多くは、戦争で捕らえられたブリトン人の捕虜であった。他の奴隷は、捕虜の子供や、奴隷制度内で生まれた者であった。

以上の4階級が、各王を頂点とするアングロ=サクソン期のブリタニアを形成させていた。

このブリタニアの形成にあたっては、当然、異教徒であるアングロ=サクソ

ン人が、宗教上の影響、つまりブリトン人が信奉していたキリスト教の影響を受けなければならなかった。

言い換えると、ブリタニアは、キリスト教の影響を受けながら、社会生活を形成、維持させなければならなかったのである。

宗教的な社会生活の形成、維持ということは、将来デインゲルトとして徴収されるための社会組織が、形成されたということの意味している。つまり、宗教上による身分の上下関係の存在である。言い換えると、法的に徴収する側の支配者と、徴収される側の非支配者の存在である。

そのことが、実際に具体的に現れるのが、異教徒であったアングロ=サクソン人のキリスト教徒化である。

このアングロ=サクソン人のキリスト教徒化には、2つの流れがあった。

それは、聖コロンバ (St. Columba, 521-597) のブリタニア西部と北部のケルト系キリスト教と、聖アウグスティヌス (St. Augustine) のブリタニア東南部のローマ系キリスト教とである。

①聖コロンバのケルト系キリスト教

アングロ=サクソン人は、ブリタニアの東南部に侵入するやいなや、略奪、結婚、支配、拡散を続けた。その結果、ブリタニア内では、各自独立した小王国が形成されていった。

つまり、この小王国の形成は、異教徒であるアングロ=サクソン人が、キリスト教徒であるブリトン人を、ブリタニア奥地へ、追いやった結果であった。

ブリタニア内から追い出されたケルト系ブリトン人は、アイルランドやウェイルズに移り住んだ。また、結婚などにより、ブリタニア内に止まったケルト系ブリトン人もいた。

このケルト民族のアイルランドの中から、聖コロンバが出現した¹³⁾。

北アイルランド出身の聖コロンバは、563年、布教活動のため、12人の修道士とともに、スコットランドのマル (Mull) 島の傍らの小島アイオナ (Iona) 島にやって来た。

アイオナ島を拠点に、聖コロンバは、ケルト系キリスト教を、徐々に浸透させ、565年頃に、ハイランド地方のスコットランド人を改宗させた。言い換えると、ケルト系ブリトン人、聖コロンバが、徐々にピクト人 (the Picts)、スコット人 (the Scots)、およびブリタニア西部と北部のアングロ=サクソン人を、キリスト教徒に改宗、帰依させていった。

②聖アウグスティヌスのローマ系キリスト教

ケント王エセルバート (Aethelbert: Ethelbert, c. 552-616, King of Kent 560-616) は、キリスト教国フランクの妃と結婚した。この結婚は、ケント王国がキリスト教国になるということの意味していた。

また、この結婚は、ヘプタキー全体が、キリスト教国に影響を受けるということをも、意味していた。

というのは、507年、この結婚を機に、ローマ法王グレゴリウス (Pope Gregory the Great, c. 540-604) は、ブリタニア東南部に宣教師を、派遣したからである。

ブリタニア東南部に派遣した、この宣教師の名は、アウグスティヌスである。

597年、キリスト教伝道師アウグスティヌスを受け入れたケント王エセルバートは、アングロ=サクソン人で、初のキリスト教徒になった。

ローマ法王グレゴリウスが、修道院長アウグスティヌスをブリテンに派遣した背景には、ローマの奴隷市場で、髪は金髪で、肌が真っ白な小さな子供たちに出会ったことにある。というのは、法王が、あの子たちは、どこから来たのかと訪ねたとき、「ブリタニアのアンゲル人」です、という答えが返ってきた。法王は、すぐに、あの子は「アンゲル人ではない、天使だ (“non Angli,” he said, “sed Angeli”)¹⁴⁾」と、考えたからである。

言い換えると、ローマ法王グレゴリウスは、キリスト教国拡大のために、ブリタニアの布教を、考えたのである。

また、その後このヘプタキー7王国は、600～850年に、宗教上の助けを借

りて、3つの独立した王国に編成されていった。言い換えると、キリスト教、あるいは異教徒の力を借りて、620年頃のノーザンブリア、720年頃のマーシア、820年頃のウェセックスの3王国が形成していった、ということである。

7世紀初期、このヘプタキー7王国の中で、最も重要で、最も有力であったのが、ノーザンブリアであった。

そのノーザンブリアに不穏、危機をもたらしていたのが、北からの脅威、ピクト族およびスコット族の侵入であった。

これに対して、ノーザンブリアは、王国の防衛、安定、そしてさらなる領土の拡大のため、堅牢な要塞を造らなければならなかった。すなわち、国境沿いのフォース湾河口に、Burgh（バラ：城市、城砦町）の建設であった。

617年ブリタニアのすべての王ブレドワルダになったエドウィン（Edwin, 617-633）¹⁵⁾ は、627年、自らヨークの司教パウリヌス（Paulinus）によって、ローマ系キリスト教徒になった¹⁶⁾。

そして、エドウィンは、北からの脅威、ピクト族から、国を守るために、burghs（バラ：城砦町）、すなわち「エドウィンのバラ（Edwin's Burgh）¹⁷⁾」（現在のEdinburgh 'スコットランドの首都エディンバラ'）を建設した。

このBurghsの建設により、ブレトワルダのエドウィンは、一時的に、ブリタニアを、対内外的に平穏にさせた。だが、ノーザンブリア王国内では、依然として、異教徒が存在していた。

その後、ローマ系キリスト教が布教を諦めたマーシア王国が力を持ってきた。

異教国マーシア王ペンダ（Pend, d. 655）は、領地拡大のために、グイネド（Gwynedd：北ウェイルズ）を支配していたケルト系キリスト教徒キャドウォラン王（Cadwallon, d. 633）と手を組み、ローマ系キリスト教国ノーザンブリアに攻撃を仕掛けてきた¹⁸⁾。

この攻撃が、633年のヒースフィールドの戦い（the Battle of Heathfield）であり、結果は、エドウィンと、その息子オスフリッド（Osfrid, d. 633）が殺害され、ノーザンブリアが、キャドウォランの支配下に入り、ケルト系キリスト

教国になってしまった¹⁹⁾。

そして、634年、エセルフリース (Ethelfrid) の子で、エドウィン治世時、スコットランドに亡命していたオズワルド (Oswald, c. 604-642) が、ヘヴェンフィールド (Heavenfield) で、ペンダの同盟者であるウェイルズのキヤドウォランを破り、ノーザンプリアの支配者になった。

この時、ノーザンプリアは、異教国になっていた。これに対して、ケルト系キリスト教徒であったオズワルドは、聖エイダン (St. Aidan) を招き、ノーザンプリアを再度、ケルト系キリスト教国にした。

642年、オズワルドは、メイサーフィールド (Masafield) で、ペンダに殺害されてしまった。

これに対して655年、オズワルドの弟、オズウィー (Oswy, c. 612-670) が、ウィンウェド (Winwaed) の川で、ペンダを殺害した。

オズウィーは、ノーザンプリアの王になり、ブレトワルダを引き継いだ。

ブレドワルダを引き継いだオズウィーは、宗教上の岐路に立たされた。

というのは、ノーザンプリア、延いては、全ブリタニアの宗教を、聖コロンバの西部と北部のケルト系キリスト教にするか、聖アウグスティヌスの東南部のローマ系キリスト教にするか、ということを決しなければならなかったからである。

この決定は、664年のウィットビー (Whitby) の宗教会議で行われた。その結果は、聖アウグスティヌスのローマ系キリスト教であった。

B. フランク王国のフェダリズム

8世紀末以降、西ヨーロッパにおいて、第2次ゲルマン民族の大移動が始まった。

すでにキリスト教国であったフランク王国に侵入してきた民族は、北からはノルマン人 (the Normans)、東からはマジャール人 (the Magyars)、南からはサラセン人 (the Saracens) であった²⁰⁾。

この3民族のうち、最大で、西ヨーロッパに影響を与えたのは、ヴァイキン

グ (the Vikings) とも称されるノルマン人である。

ヴァイキングは、現代のスカンディナヴィア半島のノルウェー、スウェーデンから、ユトランド半島のデンマークに居住していたゲルマン族の1派であった。ヴァイキングは、入り江の近くに居住していたために「入り江の民」と称され、また交戦好きな「戦士」とも称される。

このヴァイキングは、キリスト教徒ではない異教徒であった。

このヴァイキング、すなわちノルマン人は、ノルウェー人、スウェーデン人、デンマーク人の部族に分かれた。

このノルウェー人とデンマーク人とを総称したデイン人、そして、そのデイン人の1部が、フランク王国北部とイングランド東南部とに浸入し、多大な影響を与えた。

すなわち、この8世紀末以降、フランク王国では、このデイン人の侵入に対して、非常に苦しめられた。というのは、広大な土地を有していたカロリング朝 (Les Carolingiens) のフランク王のシャルルマーニュ (カール皇帝) (Charlemagne, フランク王 768-814, Karl der Grosse, 皇帝 800-814) が²¹⁾、当時海上防衛用の船舶を持ち合わせていなかったからである。ゆえに、シャルルマーニュ王は、容易にフランク王国内に、侵入してくる外敵サクソン人を阻止できなく、非常に苦しめられていた²²⁾。

また、シャルルマーニュ王 (カール皇帝) は、「皇帝」という称号を汚してはいけない、というプレッシャーがかかっていた²³⁾。

そこで、シャルルマーニュ王 (カール皇帝) は、「皇帝」の名の下、キリスト教国を存続、拡大させるために、海上防衛用の船舶の必要性を考え、海軍の建設に取り掛かった²⁴⁾。

このような外敵による危機とともに、また、シャルルマーニュ王 (カール皇帝) は、広大な帝国ゆえに、内的危機にも、遭遇しなければならなかった。というのは、外敵サラセン (Saracens) が地中海を征服し、フランク王国内の貨幣経済が衰え、メロヴィング朝 (Les Méovingiens) から続いていた俸給官僚を、統制できなくなったからである。

その結果、シャルルマーニュ王（カール皇帝）は、行政上の組織に依存しない、また人身的結びつきが強い、マナー（Manor：荘園）を経済的基盤としていた各大所領の豪族に、治安を任せざるを得なくなった²⁵⁾。

治安を任された各大所領の豪族たちは、外的に対する防衛能力を、より強化するために組織立ったものにしていった。

この組織立ったものが、フランス封建社会の核となっていった²⁶⁾。

この大所領の豪族には、伝統的文化、慣習、秩序を異にする民族が多かった。

シャルルマーニュ王（カール皇帝）の死後、フランク王国は、ルイ1世（ルドヴィッヒ1世）（Louis I: Ludwig I, der Fromme, フランク王と皇帝814-840）が、皇帝の地位を継いだ。

ルイ1世は、政に全精力を傾けなかった。それに反し、行政上の組織に依存しない大所領の豪族たちは、もっぱら勢力拡大に力を注いだ。ルイ1世の行政に、非協力的な大所領の各豪族は、ルイ1世の手腕によっては、反国王勢力になる危険をはらんでいた。

ルイ1世は、豪族の勢力拡大を抑えることができず、ただそれを監視するために、王領を、各地に計画的に配置していった。

だが、各豪族たちは、自分たちにあった政治、経済組織を作り出し、お互いに分離しようとする気運を高めていった。言い換えると、ルイ1世が、政治的手腕を發揮しないまま、伝統的文化、慣習、秩序を異にした、政治、経済組織を作り出した豪族たちが、フランク王国内に台頭してきた、ということである。

この伝統的慣習と秩序を異にした社会集団とは、ガリア社会とゲルマン社会とであった。

このような状況下の中、840年ルイ1世の死後、長男ロタールが帝国を継承して、カロリング朝のドイツ王ロタール1世（Lothar I, 795-855, ドイツ王840-843, 西ローマ皇帝843-855）になった。

その後、この皇帝ロタール1世が、帝国を治めるだけの力が無かったために、結果的に、ルイ1世の3人の息子が、王位継承を巡り、争いを始め、フラ

ンク王国が、3つの王国に分裂した。すなわち、843年のヴェルダン条約 (Traité de Verdun)²⁷⁾ によって、また870年のメルセン条約 (Traité de Meersen)²⁸⁾ によって、イタリア、東フランク王国 (ドイツ)、西フランク王国 (フランス) に、分裂した。

結果的に、イタリアは、ロタール1世 (Lothar I, 795-855, 西ローマ皇帝 843-855) の息子、ルードヴィッヒ2世 (Ludwig II, 855-875) が領有し、東フランク王国は、ルートヴィヒ2世 (Ludwig II, der Deutsche, 843-876) が領有し、西フランク王国は、シャルル1世 (カール2世) (Charles I, le Chauve, 西フランク王 843-877: Karl II, der Kahle, 西ローマ皇帝 875-877) が領有した。

また、これら3人は、デイン人の侵入、略奪行為に対して、何ら積極的に対策を講じなかった。3人の唯一の対策は、デイン人に貢納したり、デイン人を傭兵したりしたことであった。

9～10世紀、西ヨーロッパにおいては、ヴァイキングが使っていた海路を伝って、第2次ゲルマン民族の大移動が最高潮に達した。

この第2次ゲルマン民族の大移動、特にデイン人のイングランドおよびフランク王国内に侵入略奪は、本格的にフェダリズムが萌芽する要因を、作り出していった。

というのは、外部民族の侵入により、小・中の地主は、自分の土地を、有力者、大貴族に献じて、自分の身を、保護してもらおうとしたからである。

このような背景には、当然、当時の王国の王には、王国を完全に掌握できるだけの統制力や、外敵からの防衛力がなかったことが、考えられる。

現実的に、小・中の地主は、王から保護してもらうことができなくなると、身近な大貴族に頼るしかなく、この大貴族が、外敵と戦った。

当然、この大貴族は、自己の所領、領民を保護するために、勢力拡大に、努めた。

実際最初に、フランク王国を統制できた王は、メロヴィング王家でなく、カロリング王家でもない1代限りで終わったパリ伯ウード (Eudes, comte de Paris, 887-898) であった²⁹⁾。

つまり、パリ伯ウードは、888年、外敵、デイン人を、セーヌ川流域で撃退し、そして、この功績が認められ、大貴族たちから推挙され、王になった。

だが、その後、再び、カロリング王朝が復位し、西フランク王国が形成された。

911年、再度、西フランク王国は、ノルマン系のデイン人の1指揮者ロロ(Rollon, ?-931)の侵入、略奪を受けた。そしてその結果、西フランク王国は、王国の北部地域、つまりデイン人の法が行われる地域、デインロー(Danelaw)を、与えざるを得なかった。言い換えると、ノルマンディー公国(Duché de Normandie)の出現である。

このことは、西フランク王シャルル3世(Charles III, le Simple, 898-923)が、ロロとサン＝クレール＝シュル＝エプト(Saint-Clair-sur-Epte)条約を結ぶことにより³⁰⁾、ロロに、ノルマンディーの土地を、封土として授与し、ロロを自分の臣下に置いたということの意味していた。

この時点で、フランク王国には、封建社会が存在していたことになる。

9世紀後半以降になると、西フランク王国へのデイン人の侵入は、一層激しかった。

というのは、西フランク王国は、太平洋に注ぐ河川が、多かったからである。このことは、当然、海岸近くの農民は、デイン人の侵入と共に、田を捨て、村を捨て、市を捨て、奥地に逃げ込む。逃げ込む先は、有力な豪族の領地である。

また、デイン人の侵入と共に、小さな所領を持つ貴族は、自分の所領を守るために、有力な貴族と主従関係を結ぶ。

結果的に、有力な貴族は、大所領の豪族になっていった。このようにして、フランスでは、封建社会が、成立、発展していったのである。

そして、この第2次ゲルマン民族の大移動が、987年の西フランク王国の崩壊を早めた。

C. ブリテンのフェダリズム

5世紀中頃、第1次ゲルマン民族の大移動の結果、アングロ＝サクソン人が

ブリタニアに、侵入、略奪、定住してきた。

この時の定住形態は、氏族の集団を核として、社会を構成していた。

この氏族制を核として社会を構成しているアングロ=サクソン人は、やがて小さな部族的社会を構成し、小さな国家を作り上げていった。

この小国家を作り出していく過程で、ある一定の秩序が、生まれてきた。

この秩序が、身分社会、フェダリズムである。

アングロ=サクソン人が、初めて、ブリタニアに侵入して来た時は、農耕民は、兵士であり、戦闘要員であり、自由民であった。

やがて、ブリタニアに、定住して行ったこのアングロ=サクソン人の中で、部族的、民族的意識が強まるにつれて、ヘプタキーと呼ばれる7つの小国家ができた。

そして、この7王国ヘプタキー内で、身分社会を形成する4つの階級が生まれた。すなわち、キング、セイン、ケアルル（カール）、スラブである。

農耕民であるケアルル（カール）は、世襲貴族であるセインに保護してもらい代わりに、賦役あるいは生産物で、地代を払う約束をした。

言い換えると、十分に武装した軍人を擁するセインは、外敵武力から、自由な平民であったケアルル（カール）を保護する代わりに、彼らに地代の支払いを、義務づけた。

この時点で、戦争で戦う者（セイン）と、畑で働く者（ケアルル（カール）、スラブ）との間に、フェダリズムの根底にある分業が、生じた。

アングロ=サクソン人が、ブリタニアを征服し、定住、婚姻、開拓、拡散するに連れて、いくつかのより広い小国家が、徐々に形成されていった。この小国家の形成が、フェダリズムの中核をなす、中央集権化の基礎であった。

また、この小国家は、当然、小国家として形成、存在するために、最低限の兵士の徴募と、租税の徴収を行っていた。

さらに、小国家でのフェダリズムをより確立させるために、言い換えると、フェダリズム内での道徳犯罪に対しては、州裁判所が確立しており、「アングロ=サクソン法（Anglo-Saxon law）」により、ワーゲルトの金額を決定して

いた³¹⁾。

結果的に、ブリタニア内でのこの小国家の形成過程そのものが、ブリタニアにおけるフェダリズムの端緒であった、と考えられる。

Ⅲ ガヴォル (Gafol)

8世紀の初めの720年以降、ブリタニアでは、ローマ系キリスト教のもと、マーシア王国が実権を持つようになって来た。

そのマーシア王国の王は、オッフア (Offa, 757-796) である³²⁾。

オッフアは、757年に、全ブリタニアの王、プレトワルダになり、そして、今までのプレトワルダの中で、最も実権を持つ偉大な王であった。

だが、オッフアは、まだ全アングロ=サクソン王ではなかった。

そして、8世紀末以降、第2次ゲルマン民族の大移動の始まりに対して、ブリタニアに、危機が生じた。それは、790年のデイン人の組織立った侵入である³³⁾。

790年のデイン人の最初の侵入、略奪行為は、イングランドの東部海岸、すなわちノーザンプリア、イースト=アングリアの海岸から、ウェセックスの海岸において行われた。

また、この8世紀末、イングランド東部海岸と同時に、フランク王国北部海岸をも、高度な造船技術と航海技術を持っていたヴァイキング、つまりノルマン系のデイン人が、海賊的侵入、略奪行為を行っていた³⁴⁾。

このデイン人の海賊的侵入、略奪、定住、結婚、拡散の結果、820年頃からのアングロ=サクソン期には、イングランドでは、ウェセックス王国だけが存在した。

ウェセックス以外の王国は、デイン人の軍政支配区に落ちた。

この820年頃のウェセックス王は、エグバート (Egbert, 802-839) である。エグバート王は、8代目のプレトワルダであり、イングランド王の祖先である。

エグバート王も、まだ全アングロ=サクソン王ではない。

その後、865年に、イングランドにおいて最大なる危機が訪れた。その当時のイングランド王は、ウェセックスのアングロ=サクソン王エセルレッド1世 (Ethelred I, 865-871) である。

イングランドにとって最大なる危機とは、865年の秋、デイン人の組織立った‘大軍 (Great Army)³⁵⁾’の侵入である。

デイン人がイングランドに侵入してきた目的は、デイン人自身の生活を確保するための、新しい土地の獲得、定住であった。

というのは、デイン人 (ヴァイキング) が住む、スカンディナヴィア半島、ユトランド半島地域は、寒い冬が長期間続き、土壌が痩せ、貧しい生活を強いられされており、それに反して、豊潤な土地を持つイングランドが、略奪するのに十分な価値を有していたからである。

デイン人は、この目的を達成させるために、スコットランド、イングランド、アイルランド海域の制海権を奪取し、以下の3カ所を拠点地にし、侵略行為を行っていた。

すなわち、その3カ所の拠点地とは、フランク王国海岸地域を侵入するためのノアルムーティエ (Noirmoutier) 島、イングランド海岸地域を侵入するためのケントのサネット (Thanet) 島³⁶⁾、アイリッシュ海地域の制海権を掌中に入れるためのマン (Man) 島³⁷⁾ である。

言い換えると、デイン人は、この3カ所を拠点地にして、現地の抵抗勢力の度合いに応じて、自由にイングランド東部海岸とフランク王国北部海岸とを、行き来しながら侵入、略奪行為を行っていたのである。

865年の秋、組織だったデイン人の大軍は、まず初めに、イースト=アングリア (East Anglia) に上陸し、略奪行為を行った³⁸⁾。

865年、このデイン人の大軍の侵入に対して、ウェセックスのアングロ=サクソン王エセルレッド1世は、弟のアルフレッド (Alfred the Great, 871-c.900) 共に、強力に抵抗した。

だが、ケントでは、このデイン人の大軍に対して、お金を購って、ケントから出て行ってもらった³⁹⁾。

言い換えると、865年ケントは、デイン人の大軍に対して、多額のお金を支払うことにより、平和的にケントから、出て行ってもらった。

また、この865年のデイン人への支払いは、イングランド人が、最初にデイン人に支払ったお金として、記録されている⁴⁰⁾。

この時デイン人に支払ったお金は、身代金ワーゲルトである⁴¹⁾。

というのは、ケントでは、デイン人に支払う急な資金調達ができなく、支払いができる財源としては、アングロ=サクソン法による州裁判所が保有しているワーゲルトしかなかったからである。

ケントから出て行ったデイン人の大軍は、北部に移動し、イースト=アングリアに浸入していった。

なお、870年頃、イースト=アングリアだけではなくて、ノーザンプリア、マーシアは、もうすでにデイン人の軍政支配下に落ちていた。

871年、アルフレッドは、アシュダウン (Ashdown) で、デイン人と戦い、勝利を得た⁴²⁾。

そして、同年871年4月、アルフレッドは、エセルレッドの後を継ぎ、ウェセックスの王になり、ウイタンあるいはウイテナジモット (賢人評議会) で推挙されイングランド王になった。

この時点で、アルフレッドが、全アングロ=サクソン王、すなわちイングランド王になった。

871年4月、イングランド王に就いたアルフレッドは、デイン人から、和平のための賠償を請求された⁴³⁾。

871年、イングランド王アルフレッドが、デイン人に支払ったお金は、現物貢租のガヴォルである。

871年、イングランド王就任当初に、アルフレッドがデイン人に支払ったお金は、内容から考えると、デインゲルトに間違いない。だが、この言葉は当時使われていなかったので、ガヴォルという言葉を使ったが、的確である。

イングランドがデイン人に対して、和平をガヴォルで購った理由は、アルフレッド王の初期の軍事力が、デイン人の軍事力に比べてかなり劣っていたから

である。そのことは、同年871年に続いた戦いにおいて、すべてデイン人に敗北を喫してしまった、ことから判断できる。

アルフレッド王の意図とは逆に、871年後、5年間の間、デイン人は、イングランドの東部を支配し、定着し始めた。その間、イングランドは、不安定な状況下に置かれた。

この不安定な状況下をつくり出しているのは、当然、イングランドを取り囲んでいる海上の制海権が、デイン人に握られていたからである。

871年4月、アルフレッドがウェセックスの王になった直後から、ウェセックス王国への、組織的なデイン人の奇襲攻撃が始まった。

この奇襲攻撃に対して、アルフレッド王は、かろうじて逃れ、サマセット (Somerset) のアセルニ (Athelney) 沼沢地に身を隠した。

そして、反撃のためアルフレッド大王は、戦える兵士を徴収し、組織立った戦いを行った。

その結果、アルフレッド王は、チベナム (Chippenham) に近いエディントン (Edington) で、デイン人の指揮官グスラム (Guthrum) と戦い、878年5月、和平を勝ち得た。

この和平とは、ウェドモア (Wedmore) の条約成立のことである。

この878年のウェドモアの和平条約により、アルフレッド王は、デイン人を、ウェセックス王国から追い出すことができ、また、異教徒であるグスラム指揮官とその部下を、キリスト教徒に改宗させることができた。

だが、その反面、この和平条約により、2カ所、すなわち最初886年に、イングランド北東部と、後にフランク王国北部とに、デイン人の法律が施行される地域、デインロー (Danelaw) を創り出させる結果となった⁴⁴⁾。

というのは、ウェドモアの和平条約後、イングランドに留まったデイン人が、イングランド北東部にデインロー地域を、また、ケントで猛攻撃を受けたデイン人と、イングランド北東部を去ったデイン人とが、海を渡り南下し、フランク王国北部に、デインロー地域を、創り出したからである。

このウェドモアの和平条約後、イングランド内では、ウェセックス、マーシ

ア、そしてデイン人が移住、定住してしまったデインローの3つの地域に分かれた⁴⁵⁾。

その結果、イングランド内で、2つの国家が存在した。すなわち、既存のアルフレッド王を頂点とするイングランドと、デイン法が施行されるグラムス王を頂点とするデインローとである。

イングランド内に平和が回復した時、アルフレッド王は、再びデイン人に侵入、略奪されないように、軍事力の強化を図った。

具体的には、主要都市の防備⁴⁶⁾、歩兵の強化⁴⁷⁾、制海権⁴⁸⁾の奪取である。

アルフレッド王は、海上での不安定な状況下を打破するために、言い換えるると制海権を奪取するために、戦闘用の大きな船舶を建造し、そして少数の船舶から成る艦隊を組織し、海上防衛に努めた。

このアルフレッド王の戦闘用船舶は、デイン人のロング=シップ (Long Ship) であるガレイ船舶 (Galleys) よりも2倍大きく、60以上のオールを備えた頑丈船であった⁴⁹⁾。

なお、この戦闘用船舶の建造、艦隊の組織により、アルフレッド王は、イングランドのロイヤル=ネービー (the Royal Navy) の礎を築いた⁵⁰⁾。

なお、アルフレッド王は、デイン人の侵入を防ぐために、7世紀初期エドウィンが建設したburghsと同じように、ウェセックスの各主要な町に 'burhs' (バー) と呼ばれる防備を施した要塞の町、すなわち城砦町を建設した⁵¹⁾。

このウェセックスでの 'burhs'、すなわちburghs (バーグ、バラ、ブルク：城砦町)の建設は、デイン人の脅威、すなわち侵入、略奪から逃れるためであった。

この 'burhs' の建設詳細は、'Burghal Hidage' 「バーカル=ハイデッジ」という文書記録から、読み取ることができる⁵²⁾。

具体的には、'burhs' の城砦町は、Glastonbury, Cadbury, Shaftesbury, Ramsbury, …である。

またこの時すでに、アルフレッド王は、敵であったデイン人の1部を傭兵して、ウェセックス海岸を、防衛させていた。

さらに、アルフレッド王は、ウェセックス内の治安を維持するために、新しい軍隊を組織した。それは、フィアード (Fyrd: 民兵) と呼ばれる軍隊であった。そのフィアード軍隊は、2つの部隊に分けられ、1つの部隊は、有事の際、いつも駆けつけられる部隊であり、他のもう1つの部隊は、農民として、農作業に従事した。そしてその後、この2つの部隊は、お互いに交代した。

このフィアード軍隊を強化するために、また領土内の軍備を強化するために、アルフレッド王は、貴族セインに対して、協力を求めた。そして、貴族セインは、兵士であり、小作農であるケアルル (カール) に対して、「3種の必要事」(torinoda necessitas) を、課した。すなわちフィアードに従軍する義務 (Fyrd-fare)、城砦町の建設・補修 (burh-bote)、橋梁の改築 (bridge-bote) である⁵³⁾。

この「3種の必要事」、すなわち兵士であり、自由農民であった小作農ケアルル (カール) の「3大義務」は、貴族セインに保護してもらうための代償であった。

イングランド国民の生命を守るという観点から、その後、アルフレッド王は、大王 (the Great) という称号を得た。

その後、デイン人の大軍による軍事力は、アルフレッド大王が想像する以上のものであり、ウェセックス内部まで、デイン人が侵入、定住していった。

10世紀末頃になると、スカンディナヴィア半島、ユトランド半島地域に住むヴァイキング、すなわちデイン人たちに一応の統一国家ができた。

その統一国家を形成させたのは、ノルウェーの大部分を支配し始めた、後のデンマーク王スウェイン1世 (Sweyn I, c.986年からデンマーク王, d.1014) である⁵⁴⁾。

この統一国家につき、デイン人は、組織的に、かつ国家事業的な性格を持ち、980年に、再び、急激にイングランドを侵入した⁵⁵⁾。

このアングロ=サクソン期、980年のデイン人の侵入は、当然、865年の侵入時よりも、規模的には大きく、また指揮命令系統も行き届いていた。

この980年に侵入して来たデイン人に対して、エセルレッド2世 (Ethelred

II, 978-1016.4) は、何ら防衛手段を講じることができなかった。

そこで、エセルレッド2世は、イングランド国民の身を守るために、デイン人に、金銀を手渡した。いわゆる、身代金の支払いであった。

この身代金の支払いは、イングランド領地から、デイン人が友好的に出て行ってもらうための解決策である。この解決策は、デイン人を追い払うために、865年にケント王が行ったお金に依る解決策と同じであった⁵⁶⁾。

このエセルレッド2世がデイン人に支払ったお金は、当然、ガヴォルである。

この身代金であるお金の出所は、農民に対し、緊急に徴収された特別課税、つまり地租である。

言い換えると、この身代金は、ガヴォル (Gafol: 現物貢租) と呼ばれる金銀からなる地租である。

すなわち、エセルレッド2世が、デイン人に支払った“980年以降のガヴォル”は、イングランド国民の身を守るための“地租税からなる賠償金、身代金のガヴォル”であった、といえる。

金銀からなる巨額な身代金に味を占めたデイン人は、980年以降、再び大軍をなして、イングランドに侵入し、再度、金銀を要求してきた。

991年には、今度は、組織的に、かつ大規模にイングランドにおいて、デイン人の侵入が始まった⁵⁷⁾。

具体的には、991年、デンマーク王スウェイン1世と、後のノルウェー王オラフ (Olaf Tryggvason, 995-1000) 率いる93隻の艦隊と、7,000人以上の戦士による、エセックスの海岸の襲撃である⁵⁸⁾。

この991年の襲撃は、マルドン (Maldon) の戦いであり、結果は、エアルダーマンのビルフトノート (Brihtnoth: Byrhtnoth, d.991) の戦死で、エセックスでのデイン人の侵入、略奪が始まった⁵⁹⁾。

この991年の大規模なデイン人の侵入理由は、2つある。

1つ目は、デイン人本国での人口の自然増により、気候が温暖で、肥沃な土地を求めて、南下しなければならなかったからである。

2つ目は、デイン人にとって外的であったフランク王国が、衰退したことにより、自由に南下出来るようになったからである。

この2つの理由により、デイン人が、イングランドに侵入してきたのである。

そこで再び、エセルレッド2世は、991年にイングランド国民の身を守るために、ガヴォル、言い換えると、平和的にデイン人を追い払うためのガヴォルを、確実にかつ多額に、支払わなければならなくなった⁶⁰⁾。

このガヴォルは、1ハイド (hide: 自由民が、自分の家族と使用人とを養えるだけの地積の単位) 当たりの旧土地評価額を基準に、その1ハイドの土地所有者につき、銀2シリングの土地課税であった⁶¹⁾。

ガヴォルを支払わなければならなかった背景には、当然、イングランドの軍事力が、デイン人の軍事力に比べて劣っていた、ということがある。

そこで、991年、エセルレッド2世が、デイン人に支払ったお金は、デイン人と和平を結ぶための賠償金である。また、このお金は、当然、一般的に広く、確実に、多く集められる農民からの土地課税、つまり地租である。

この991年に、エセルレッド2世がデイン人に支払ったガヴォルは、10,000パウンドであった⁶²⁾。

991年以降のガヴォルは、以下の通りである⁶³⁾。

年	パンド
991	10,000
994	16,000
1002	24,000
1007	36,000
1012	48,000

では、このデインゲルトは、どのようにして徴収されたのであろうか。
徴収者は、王であるエセルレッド2世。

徴収実行者は、領主のセイン。

徴収された者は、兵士であり、自由農民であった小作農ケアルル（カール）。小作農ケアルル（カール）は、一般に、領主セインに対し農地からの地租を、またアルフレッド大王の孫アセルスタン（Athelstan, 924-34）治世時から始まった教会に対する「10分の1税（Tithe）」を、支払っていた⁶⁴。

さらに、この一般の課税に加えて、小作農カールスは、991年に、王から特別課税であるガヴォル税を課せられた。この特別課税は、当然、土地に課せられる地租である。

フィアード（Fyrd：民兵）にとって、たった1回の特別税であるガヴォルの支払いであれば、何ら問題は、なかった。

だが、その後、デイン人が、再度イングランドにやって来ることにより、小作農ケアルル（カール）の負担は、増加し続けた。

デイン人による農場の焼き討ち、農産物の略奪、教会や農民居住地の破壊、「3種の必要事」や租税であるデイン税の負担増により、小作農ケアルル（カール）は、自己の生活ができなくなっていった。

王へのデインゲルトの支払いが困難となり、また王に対するフィアード（Fyrd：民兵）としての機能が果たせなくなった小作農ケアルル（カール）は、領主セインに助けを求めた。その結果、小作農ケアルル（カール）は、軍事力を要するセインとの結びつきを、一層、強固なものとしていった。

言い換えれば、自由農民であった小作農ケアルル（カール）は、没落して行つた。没落していった行き先は、当然、半自由農民であった。

つまり、ケアルル（カール）は、軍事力を要するセインの立場を、より優位にしていった。この時点で、戦う者であり、支配者であるセイン、反対に保護される者であり、従属者であるケアルル（カール）、という2重構造が、より鮮明になってきた。

結果的に、デイン人に浸入により、イングランド内部では、封建制度の体制に、より近づいていった、ということがいえる。

この封建制度の体制に近づいていったことにより、エセルレッド2世は、ガ

ヴォルを、より徴収し易くなった。

エセルレッド2世治世当初の980年、身代金であった地租・ガヴォルは、その後の991年以降に、和平を購うための地租・ガヴォルにかわった。

991年のデイン人侵入以来、イングランド領地内のデインローでおとなしく生活していたデイン人が、デインロー外で、過激な行動をとるようになってきた。言い換えると、991年のデイン人の侵入以来、デインロー内のデイン人の略奪心に火が付き、イングランド領地内を侵入、略奪し始めたのである。

これに対して、エセルレッド2世は、デインロー内のデイン人を、攻撃し始めた。

この攻撃に対して、デイン人の反撃は、激しく、イングランド領地内を、徹底的に荒らした。

結果、イングランド国内は、イングランド政府 vs. デインロー人という構図が出来上がり、危機的状態に陥ってしまった。

度重なる巨額なガヴォルの支払い、および身の危険を感じたエセルレッド2世は、1002年、ノルマン人（ヴァイキング）と同盟を結ぶために、フランク王国の一部であるノルマンディー公国に避難した。

言い換えると、1002年、エセルレッド2世は、自身の保身のため、ノルマンディー公国に逃げ込み、そしてノルマンディー公リシャール1世（Richard I, Duke of Normandy, 943-996）の娘エマ（Emma of Normandy, ?-1026）と政略結婚した⁶⁵⁾。

ここで1つ注意しなければならないことがある。それは、アングロ=サクソンの血を引くエセルレッド2世が、ノルマンの血を引くエマと結婚したことである。

というのは、この結婚が、将来、イングランド王国に、ドゥームズデイ=ブックを推し進めたウィリアム1世に、深く関わりあっているからである。

ウィリアム1世の家系図を整理してみる。

- ノルマンディー公リシャール1世は、ウィリアム1世の曾祖父。
- リシャール1世の長男リシャール2世（Richard II, Duke of Normandy,

996-1026) は、ウィリアム1世の祖父。

- リシャール2世の妹が、エマ。
- エマの結婚相手が、エセルレッド2世。
- エマとエセルレッド2世との長男が、エドワード証誓王 (Edward, the Confessor, 1042-1066)。
- リシャール2世の次男ロベール1世 (Robert I, Duke of Normandy, 1027-1035) は、ウィリアム1世の父。

その後も、イングランドにおいて、デイン人の大規模な侵入が続けられた。具体的には、ノルウェーの大部分を支配していたデンマーク王スウェイン1世の3度の侵入である。

デンマーク王スウェイン1世は、大艦隊率いて、1度目と2度目、すなわち1009年、1011年に、イングランドを襲撃した。さらに、スウェイン1世は、3度目の1013年において、イングランド王位略奪のための大襲撃を行った。

その期間、イングランド国内では、エセルレッド2世の逃亡により、無政府状態が続き、危機的状态に陥っていた。

このような状況下の中、デイン人が多く住んでいたイングランド国内のノーザンプリア、マーシア、ウェセックスが、異教徒デイン人のスウェイン1世を、1013年に、イングランド王に選んだ。

スウェイン1世は、1013年にイングランド王に選ばれたが、翌年1014年に亡くなった。その後を受け継いだのは、息子のクヌート (カヌート、クヌッド: Cnut I : Canute I, 1014-35) である。

そこで今度は、イングランドに滞在していたエセルレッド2世の息子エドマンド (Edmund II, Ironside, c.989-1016) が、1015年に、クヌート1世に、戦いを挑んだ。

1016年4月、エセルレッド2世が亡くなると、エドマンは、ロンドン市民、およびウィタン (witan: 賢人評議会) で、イングランド王に推挙され、エドマンド2世剛勇王になった。

つまり、イングランド国内では、イングランド王位を巡って、異教徒デイン

人であるクヌート1世 vs. アングロ=サクソン人であるエドマンド2世剛勇王という戦いの構図が出来上がった。

エドマンド2世剛勇王は、デイン人クヌート1世に抵抗したが、2人の家臣の裏切りにより殺害された⁶⁶⁾。

エドマンド2世剛勇王が、2人の家臣の裏切りにより殺害されたことにより、イングランドのアングロ=サクソン軍は、デイン人に対して撃つ術がなく敗北した⁶⁷⁾。

エセルレッド2世、および息子のエドマンド2世剛勇王のデイン人排斥策(デイン人国外追放政策)は、ことごとく失敗し、イングランド国内は、荒廃し、デイン人が自由勝手に占領し始めた。

なお、エセルレッド2世が亡くなる1016年4月まで、デイン人のクヌート1世が、イングランドを、占領した。

そこで、1016年4月以降、イングランドの賢人評議会ウィタンは、デイン人の軍事力に屈服し、デイン人クヌート1世を、正式にイングランド王に推挙した。

このことにより、異民族デイン王家が、イングランドに君臨することになった。

1016年4月以降、すなわち1017年にイングランド王になったデイン人クヌート1世は、イングランド国内の治安を守らなければならなくなった。

クヌート1世は、イングランド国内の治安を守るために、またデイン人とイングランド人とを平等に扱うために、2つのことを行った。

第1は、エセルレッド2世の妻だった、年上の未亡人エマと結婚したこと。

第2は、陸海軍を強化したこと。

クヌート1世が、未亡人エマと結婚したことによって法的に以下の3人の息子を持つことになった。

1. ハロルド(後のHarold I, 1035-40)。ノーサンプトンのアelfギフ(Aelfifu of Northampton)との間の子。

2. ハーザクヌート(Harthaenut, 後のCnut II, 1040-42)。未亡人エマと

の間にできた子。

3. エドワード (後の Edward the Confessor, 1042-1066)。未亡人エマの連れ子。エマと前イングランド王エセルレッド 2 世との間の子。

この陸海軍の強化とは、エドマンド 2 世剛勇王が、2 人の家臣の裏切りで敗北したことを学習し、護身兵 (Bodyguard) と、常備軍 (Standing Army) とを兼ね備えた親衛隊ハウスカール (Houscarl) を新設したことである。

1017年にイングランド王になったクヌート 1 世は、イングランド国内の治安を維持するための親衛隊ハウスカールの維持費、またイングランドを海外から防衛するための軍事費、さらに祖国デンマークを防衛するための軍事費、つまり大艦隊を維持する巨額な軍費が必要になった。

そこで、イングランド王クヌート 1 世は、いままでイングランドで徴収していた地租ガヴォルを、ヘレゲルト (Heregeld) という軍税の名に変え、イングランドをも含めた祖国防衛戦費に当てることにした。

なお、クヌート 1 世は、自分が支配する帝国が巨大になりすぎて、イングランドを 4 つの州、ノーザンブリア、マーシア、イースト=アングリ、ウェセックスに分け、そして、その統治を、ウェセックスの長官ゴッドウィン (Godwine, d.1053) に任せた。

このゴドウィンが統治していたイングランドでは、平穏な時期を過ごしていた。

また、このイングランドが平和な時期、ノルマンディーでは、リシャール 2 世の次男ロベール 1 世が支配していた。このノルマンディーで、ロベール 1 世の重要な息子が、1027 年頃に誕生した。その息子の名は、ギヨーム=バタール (Guillaume le Bâtard c. 1027-1087) であり、後のノルマンディー公ギヨーム 2 世 (Duc de Normandie Guillaume II, c. 1035-1087)、さらに、イングランド王ウィリアム 1 世 (William I, 1066-1087) になった人物である。

1035 年にクヌート 1 世が亡くなると、順調にハロルドがイングランド王になった。その後、ハーザクヌートも王位についた。だが、この 2 人の息子ハロルドとハーザクヌートは、父クヌート 1 世のような善良な王ではなく、“粗暴

で、無神論者で、無節操な若者”であった⁶⁸⁾。

1042年に、ハーザクヌートが亡くなると、義兄エドワードが、ウィタンの推挙により、ノルマンディーから、イングランドに帰国し、イングランド王位についた。

エドワードは、イングランド王になってから、余りにも敬虔なカトリック教徒であったので、“証誓王”というあだ名がついた。

エドワード証誓王は、青年時代ノルマンディーで過ごしており、ノルマンディーの文化高い習慣が身に付いていた。

このためエドワード証誓王は、イングランドに帰国した時も、ノルマンディーの習慣を、変えることはなかった。

具体的には、ノルマンディーの多くの文化人を、イングランドに招き、そして、その中の数人に、政府の重要ポスト任せ、彼らに土地を与え、定住させた。

これらに対して、快く思っていなかったのは、元イングランドの統治者であり、アンチ=ノルマンのウェセックスの長官ゴドウィンである。

エドワード証誓王 vs. ゴドウィン長官という構図が激しくなった時、アンチ=ノルマンのゴドウィンとその息子ハロルド（後の Harold II , Godwinson, d. 1066）は、身の危険を感じ、1051年一時イングランドを離れ、海外に逃れた⁶⁹⁾。

このゴドウィンとその息子ハロルドが、1051年イングランドを離れた直後に、イングランド王位に興味を持ち、しかもエドワード証誓王と血縁関係にあるノルマンディー公ギヨーム2世が、エドワード証誓王に、会いに来た⁷⁰⁾。

この時、世紀の重要な約束が行われた。その約束の内容は、子供のいないエドワード証誓王が、自分の後のイングランド王位をノルマンディー公ギヨーム2世に、譲るということであった。すなわち、1051年のイングランド王位譲渡の約束である。

このイングランド王位譲渡の約束を胸に秘めて⁷¹⁾、ノルマンディー公ギヨーム2世は、ノルマンディーに帰った。

その1年後の1052年に、アンチ=ノルマンのゴドウィンとその息子ハロルドが、大艦隊を引き連れ、イングランドに舞い戻り、ノルマン人をイン格蘭

ドから追い出した。

このことにより再び、ゴドウィン、イングランドでの地位、アール（伯）を、回復させ、イングランドでの権力を拡大させてった。

1053年に、ゴドウィン伯が亡くなると、息子のハロルドが後を継ぎ、ウェセックス伯ハロルドになった。ハロルド伯は、アンチ=ノルマンの政策を推し進め、ますますイングランド内での権力を拡大させていった。

このことに脅威を感じたエドワード証誓王は、1064年にイングランドの王位を、ノルマンディー公ギヨーム 2世に譲るといふ、王位譲渡の告示を行った⁷²⁾。

そこで、エドワード証誓王は、この王位譲渡の告示を内外に、確実に知らせるために、ハロルド伯に、ノルマンディー行きを命じた。

エドワード証誓王がハロルド伯に、ノルマンディー行きを命じた背景には、2つの理由がある。

1. ハロルド伯に、イングランド王位継承を、諦めさせるため。
2. ノルマンディー公ギヨーム 2世に、約束を果たしたことをしらせるため。

ハロルド 2世は、ノルマンディー行きの途中、ノルマンディー沖で、暴風雨に遭遇した。そして、かろうじて助かったものの、ハロルド伯は、ポンティユー伯ギイ（Graaf Guy de Ponthieu）に捕らえられた⁷³⁾。

そのハロルド伯を、身代金を支払って助けたのが、ノルマンディー公ギヨーム 2世であった。

ノルマンディー公ギヨーム 2世は、自分の野望を実現させるために、ハロルド伯に対して、自分がイングランドの王位を継承するのを、賛成、手助けしてくれ、という約束を、2つの聖遺物櫃に手を置かせ、誓わせた⁷⁴⁾。

だが、1066年1月5日、エドワード証誓王が亡くなると、ノルマンディー公ギヨーム 2世の意思を無視して、ウィタン賢人評議会は、イングランド王に、ハロルド伯を推挙した。そして、ハロルド伯は、晴れてハロルド 2世になった。

このことに意義ありとして、激怒したのは、ノルマンディー公ギヨーム 2世である。

ノルマンディー公ギヨーム2世は、イングランド王ハロルド2世を叩くために、即、戦争の準備取り掛かり、エスネック船(esnéque)を、建造させた⁷⁵⁾。

1066年9月28日、ノルマンディー公ギヨーム2世は、エスネック船に乗りヘイスティングス(Hastings)の西南ペヴェンジー(Pevensey)に上陸し、ヘイスティングスの戦いとなった。

このヘイスティングスの戦争は、1066年10月14日の9時に始まり、16時には、結果が判明した。すなわち、ハロルド2世率いる親衛隊ハウスカール(Houscarl)の敗北。そして、武装の点で圧倒的に優れていたギヨーム2世の勝利である。

勝利の要因は、2点ある。

1. 良く訓練された封建的騎馬兵
2. 良く訓練された封建的騎士と弓兵

1066年10月14日のヘイスティングスの戦いで勝利を収めたノルマンディー公ギヨーム2世は、イングランド王になるために、同年1066年12月25日、ウェストミンスター=アベイ(Westminster Abbey)で、戴冠式を挙げた。そして、この戴冠式を挙げたことにより、ノルマンディー公ギヨーム2世は、はれてイングランド王ウィリアム1世になった。

IV ドゥームズデイ=ブック

イングランド王になったアングロ=ノルマンのウィリアム1世に、最初に課せられた仕事は、ハロルド2世を支持し、またはヘイスティングスで戦ったすべてのアール(Earl:伯)の土地を、没収することであった⁷⁶⁾。

この土地の没収は、その後、経済調査により、登記されることとなる。

具体的には、ウィリアム1世が、イングランドの旧セイン(the Thanes, the Thegns:世襲貴族、領主、)のすべての土地を、没収し⁷⁷⁾、そして、その没収した土地を、家臣のノルマン人に分け与えることであった⁷⁸⁾。

ウィリアム1世は、イングランドの土地を没収することにより、支配地を拡大させ、国内の治安を安定させ、そして、それと共に、その土地からの地租に

より、戦費と徴収し、海外からの敵に、対抗しようと、考えたのである。

このような考え方から、ウィリアム1世は、征服後、2～3年以内に、イングランドのすべての土地を、没収した。

また、ウィリアム1世は、この2～3年の間、国内の治安維持と、海外からの防衛とを、同時進行で考えなければならないという責務に立たされていた。

没収した土地の地租は、当然、デイン人に対抗するために使われる。

いわゆる、地租デインゲルトの徴収である。

この時点までの地租の変遷は、以下の通りであった。

エセルレッド2世治世当初の980年の地租は、デイン人に対して、身代金として捻出された。その地租は、ガヴォルと呼ばれる。

その後の991年以降の地租は、デイン人に対して、和平を購うために捻出された。この地租もガヴォルと呼ばれる。

クヌート1世治世時の地租は、祖国防衛費のために捻出された。この当時の地租は、軍税ヘレゲルトと呼ばれる。

ウィリアム1世は、この軍税を、はっきりデイン人に対抗するための税として、徴収するようになった。

そこで、この時点で、はっきり地租は、デイン人に対抗するお金として、デインゲルトと呼ばれるようになった。

デインゲルトという言葉は、ウィリアム1世治世後に使われる言葉であり、それ以前では、使わないほうが良い言葉である。

土地の没収を速やかに行うために、言い換えるとデインゲルトを増加させるために、ウィリアム1世は、ノルマンディーを含めたヨーロッパ大陸のフェダリズムとは、多少異なったフェダリズムを、導入しなければならなかった。

では、ノルマンディーを含めたヨーロッパ大陸のフェダリズムとは、どのようなものなのか。

フェダリズムの政治経済的特徴は、ヒエラルキー (Hierarchie) 的な権力の下方への委任である。

ノルマンディーを含めた西ヨーロッパのフェダリズムは、王のみが土地全部

を所有し、王にとって重要な家臣たちは、平時でも軍事でも、王に奉仕するという条件で、王から土地を借り、その土地を保有できた（大地主）、ということである。

また、このような条件で、重要な家臣たちは、自分の配下たちに、土地を貸与していた（小地主）。

王に対して、“臣従の礼”を尽くすのは、重要な家臣たちである（大地主）。家臣の配下たちは、王に“臣従の礼”を尽くさなく、自分の直属の上司である家臣たちに、“臣従の礼”を、尽くしたのである（小地主）。言い換えると、王と大地主とがトラブルになったときは、小地主は、恩恵を受けている大地主の味方になったのである。大地主の味方になっても、小地主は、反逆罪として罰せられない。

これに対して、ウィリアム1世は、独自のフェダリズムを作り上げた。

ウィリアム1世は、没収した土地を、ほとんどノルマン人からなるバロン（あるいは、直接土地保有者=直属受封者：tenants-in-chiefといわれる人）に、分け与えた⁷⁹⁾。

なお、この直接土地保有者=直属受封者には、バロンと同様、一定の軍事的奉仕と一定の慣習的税の支払いとを義務とした、1部教会指導者も含まれる。

アングロ=サクソン人から、イングランドの大部分の土地を取り上げ、その取り上げた土地の1部を、自分の家臣、ノルマンディーから連れてきたバロンたちに分け与えて、それを大地主として、保有させた⁸⁰⁾。

なお、ウィリアム1世が封土を与えた直接土地保有者=直属受封者は、190人弱で、その内、11人がその封土の半分を、保有していた⁸¹⁾。

このようなことから、イングランド内では、少数の支配者ノルマンディー貴族と、大多数の被支配者イングランド原住民とが、存在するようになった⁸²⁾。

イングランド内での最大の大地主所有者は、ウィリアム1世である。大地主も、小地主も、すべてイングランド国民は、ウィリアム1世に対して、“臣従の礼”を、尽くさなければならなかった。

ウィリアム1世のフェダリズムの特徴は、王と大地主とがトラブルになった

とき、小地主は、王に味方しなければならない、ということである。もし、王に味方しなければ、小地主は、反逆罪として罰せられる、ということである。

この独自のフェダリズムにより、ウィリアム1世は、今までの王よりも、イングランド内で権力を拡大させ、国民を掌握できたのである。

ウィリアム1世にとって、この地租デインゲルトをより正確に、かつ確実に徴収、増加させるためには、このようなフェダリズムの導入が必要不可欠であった⁸³⁾。

このフェダリズムを、イングランド国内に浸透させるために、ウィリアム1世は、ノルマンのバロン(The Norman Baron: 貴族)たちに、多くの城を築かせ、そして、奪い取った多くの分散した領地を、分散した状態で、分け与えた⁸⁴⁾。

言い換えると、ウィリアム1世は、自分の身を守るために、重要都市の治安を、腹心のバロンに、築城により任せたとである。反対に、イングランドの領主の築城、および城の所有は禁止した。

重要都市ではない地方の治安は、中央政府派遣、すなわちウィリアム1世から勅命を受けたバロンの長官(sheriff)に任せ、その長官には、地方のバロンよりも、強力な権力を委譲させた⁸⁵⁾。

また、政治・経済に長けていたウィリアム1世は、自分から直接封を受けている都市のバロンたちが、あまり権力を持たないように注意を払った。

すなわち、ウィリアム1世は、1バロンに広大な土地を与えないよう、土地が分散した状態であるように注意を払った。

このことは、当然、1バロンに、強力な軍事力・経済力を持たせない、ということが背景にあった。

地租デインゲルトを、有効にかつ確実に徴収するために、ウィリアム1世は、征服地イングランドのすべての土地の資産価値を、正確に熟知していなければならなかった。

そのために、ウィリアム1世は、1085年に、イングランド全土に亘って、国勢調査簿ドゥームズデイ=ブックの下地になった、経済調査を行わせた。

その経済調査とは、各州の代表バロンを呼び、各州の法律を調べさせ、また、各州に勅命を受けたバロンの特別委員を送り、すべての村々を次々に、土地調査簿に登記させることであった⁸⁶⁾。

ウィリアム1世から勅命を受けた特別委員のバロンは、各州に出向き、州の長官、すべてのバロン、およびその家臣であるノルマン人、すべての土地保有者に対して、教理審問を行った。

具体的な教理審問は、「あなたのマナー (manor) の名前は何か。エドワード王治世時には、誰が土地を保有していましたか。今、その土地は誰が保有していますか。その土地に、いくらの領地面積ハイド (hide) が含まれていますか。保有地には、何台の犁がありますか。保有地を所有している人は、何人ですか。その保有地には、何人の隸農 (villeins)、小屋住農 (cottiers)、自由民、ソクマン (socmen) がいますか。どのくらいの森林地がありますか。どのくらいの草地がありますか。どのくらいの牧草地がありますか。どのくらいの水車がありますか。どのくらいの漁業場がありますか。等々⁸⁷⁾」である。

すなわち、ウィリアム1世は、土地は誰がどのように所有しているのか、そして、重要な地租は、どのように徴収され、いくらののか、を知りたかったのである。

この経済調査により、多くの新しい領地が、ウィリアム1世の支配下に入った。そして、当然、ウィリアム1世は、家臣に広大な領土、巨大な権力を持たせないように、この新しい個々の分散した領地を、分散したままの状態、家臣に分け与え、保有させた。

ウィリアム1世が、このように征服地イングランドでの巨大な権力の保持、および経済力を知りたがった背景には、当然、デイン人の脅威があったからである。

フェダリズムの浸透、そして、経済調査、デインゲルトの徴収は、ウィリアム1世が、王である限り、続けていかなければ経済政策であった。

そこで、ウィリアム1世は、このデインゲルトの正確で、正当な徴収のため、1086年に、経済調査をまとめたもの、すなわち国勢調査簿であるドゥームズデ

イ＝ブックを完成させた⁸⁸⁾。

なお、この国勢調査簿であるドゥームズデイ＝ブックは、2巻から成る。

この国勢調査簿ドゥームズデイ＝ブックの完成により、ウィリアム1世は、イングランドの全土地の半分を所有することが分かり、残りの半分を、教会指導者を含めた、大部分バロンである直接土地保有者＝直属受封者に分け与えた。

この時点で、以下のような身分的社会階級が、より厳格に、法的に確立した。

- ・ウィリアム1世。イングランド全土の土地半分を所有。封建的大土地所有者。
- ・バロン。王に対し、法的に誓約した直接土地保有者＝直属受封者。その代償として、王に対し軍事的奉仕で地代を払い、また慣習税を支払う。小さく分割された封土を保有。その小さく分割された土地に保有農 (tenant) を住ませ、働かせた。
- ・保有農。バロンに対し、法的に誓約し、バロンの土地を保有。バロンに対し、軍事的奉仕で地代を払い、また慣習税を支払う。また、その土地に農民を住ませ、働かせた。
- ・農民。保有農のために働き、慣習税を支払った。保有農の許可なしには、移動できない。

いわゆるヒエラルキー的な身分関係、いわゆるフェダリズムの確立である。

なお、ウィリアム1世は、フェダリズムという言葉のもとに、上記のような身分関係を、確立させたわけではない。

というのは、このフェダリズムという言葉は、後世、歴史家たちが、名付けた言葉である、からである。

ウィリアム1世は、この国勢調査簿ドゥームズデイ＝ブックにより、すべてのイングランド国民から徴収される税が、いくらの額になるかを、統計的に正確に知り、イングランドの土地資産価値を、把握した。

この1086年、国勢調査簿ドゥームズデイ＝ブックの完成により、ウィリアム1世は、正確で定期的な戦費調達を可能にし、イングランド独自のフェダリズムを確立させた。

V おわりに

国勢調査簿ドゥームズデイ=ブックを問題にした場合、当然、触れなければ問題は、デインゲルトである。

デインゲルトの出現過程、およびその名称の変遷は、イングランドの経済史上、重要な意味を含んでいる。

というのは、イングランド王国の建国そのものに、深く関わっているからである。

もし、デインゲルトの前身ガヴォルの徴収が、徴収されなかったり、滞っていたりしていたならば、イングランド王国は、建国されていなかったであろうし、もし建国されていたとしても、建国当初の大きさではなかったであろう。

デインゲルトという言葉は、ウィリアム1世治世時から、使用されなければならない。

なお、不動産、地租デインゲルトは、ウィリアム1世治世時から、毎年、定期的な課税として、徴収されるようになった。だが、1194年以降、課税の重点が、デイン人に対するのではなく、また不動産の地租でなく、動産課税に移っていったので、廃止された。

デインゲルトを、正確に徴収、増収するために、始まったイングランドの経済調査、結果的には、国勢調査簿ドゥームズデイ=ブックの出現となった。

この国勢調査簿ドゥームズデイ=ブックの出現が、ウィリアム1世を、財政的裏付けをもとにイングランドの統一支配を可能にさせた。そしてまた、この出現が、後のイングランド財政の礎を築くことになった。

このようなことから考えると、イングランドの経済史上、ウィリアム1世を、初の支配者、そして、イングランド財政の基礎を、築いた人物と評さなければならないのである。

注)

- 1) ・F. M. Stenton, *Anglo-Saxon England*, Third Edition, Repr. of 1971, ed., Oxford University Press, 2001, p.376.
 - ・Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol.1, The History of England from the Earliest Times to the Norman Conquest, Edited by William Hunt, Reginald L. Poole, Repr. of 1914, ed., New York: Ams Press, Kraus Reprint Co., 1969, p.381, n.1.
 - ・J. A. Green, "The last of Danegeld" *The English Historical Review*, Vol. 96, No.379(April 1981), p.241, and p.242, n.3.
- 2) アングロ=サクソン時代前、英国の呼び方は、ローマの支配により、ブリタンニア (Britannia) と呼ばれていた。その後、アングロ=サクソン人が英国に侵入、定住してからは、英国の呼び方は、937年アセルスタン (Aethelstan, c.895-939) が、ブルナンバラ (Brunanburh) の戦いで、ウェイルズ人とスコット人との連合軍を、撃破するまでは、イングランドとする。というのは、ブリテン島内に、スコットランド含まれていないからである。また、937年のアセルスタン王が、ウェイルズ人とスコット人との連合軍を、撃破してから、1066年のウィリアム1世の誕生までは、ブリテンとする。というのは、ブリテン島内にスコットランドが含まれているからである。
- 3) このフランク王国の名前が、現在のフランスの国名になった。J. R. Macdonald, *A History of France*, Vol. 1, Repr. of 1915, ed., New York: Ams Press Inc., 1971, p.7.
- 4) 現在のU.K. (the United Kingdom of Great Britain and North Ireland) の呼び名には、いろいろな歴史の変遷がある。また、最大の島であるブリテン (Britain) についても、同じことが言える。
 - ・ブリテンの最初の呼び名は、経済史家ベーダ (Bede) の研究によると、アルビオン (Albion) と表記されていた。Bede, *A History of the English Church and People*, Translated and with an Introduction by Leo Sherley-Price, Revised by R. E. Latham, Repr. of 1955, ed., Penguin Books, 1968, p.37.
 - ・紀元前約500年頃、ハルシュタットからブリテンにケルト人 (the Celt) 移住して来た時は、ブリテンは、ブリタニ人 (the Pritani)、あるいはプリテニ人 (Priteni) が住むプレタニ島 (the Pretanic Islands) と表記されていた。Martyn Bennett, *Illustrated History of Britain*, Trafalgar Square Publishing, 1992, p.23. この高度な文化を持ち、勤勉なケルト人は、ブリタニ、あるいはプリテニの先住民を凌駕、混血し、各地に広がって行った。
 - ・紀元前55～54年、カエサルスのローマ軍が侵入して来た時は、ラテン語でブリタンニア (Britannia) と表記された。Woodward, E. L., *A History of England*, Repr. of 1947, ed., Cambridge University Press, 1984, p.2.
 - ・407年、アングロ=サクソン人が渡来、侵入、進攻して来た後は、ラテン語読みのブリタンニアが、英語読みでブリタニア (Britannia) と表記された。
- 5) Edward James, *The Northern World in the Dark Ages, 400-900*, *The Oxford Illustrated History of Medieval Europe*, Edited by George Holmes, Repr. of 1988, ed., Oxford University Press, 1933, p.71.
- 6) Cf. Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol.1, *op. cit.*, pp.226-227.
- 7) Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol.1, *ibid.*, p.23.
- 8) Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol.1, *ibid.*, p.141 and p.232.

- 9) Christopher Brooke, *The Saxon and Normans Kings*, Third Edition, Repr. of 1963, ed., Blackwell Publishers Ltd, 2001, p.22.
- 10) John Blair, *The Anglo-Saxon Period (c.440-1066)*, Edited by Kenneth O. Morgan, *The Oxford History of Britain*, Repr. of 1984, ed., Oxford University Press, 1988, p.76.
- 11) Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol.1, *op. cit.*, p.226.
- 12) Cf. F. M. Stenton, *Anglo-Saxon England*, *op. cit.*, pp.261-262, n.1.
- 13) Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol.1, *ibid.*, p.147.
 - ・聖コロンバ (St. Columba : コロンバヌス Columbanus) は、アイルランド、スコットランドの守護聖人である。聖コロンバの伝説として、ネス (Ness) 川から、ネッシーを、追い出した、ということがある。なお、聖コロンバの聖骸物は、現在スコットランド博物館にある。その聖骸物は、家の形をした小さな入れ物の中にある。
- 14) Cyril E. Robinson, *England, A History of British Progress from the Early Ages to the Present Day*, New York: Thomas Y. Crowell Company, 1928, pp.20-21.
- 15) Christopher Brooke, *The Saxon and Normans Kings*, *op. cit.*, p.89.
 - ・エドウィンは、アングロ=サクソン7王国の頂点の王、すなわちブレドワルダと呼ばれる王であり、全アングロ=サクソン王ではなかった。言い換えると、エドウィンは、全ブリタニア王である。
- 16) Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol.1, *op. cit.*, p.142.
- 17) Cyril E. Robinson, *England*, *op. cit.*, p.19.
- 18) John Blair, *The Oxford History of Britain*, *op. cit.*, p.71.
- 19) Cf. Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol.1, *op. cit.*, pp.144-145.
- 20) J. R. Macdonald, *A History of France*, Vol. 1, *op. cit.*, p.8.
- 21) ペパン=ル=ブレッフ (Pépin le Bref, Pippin der Jungere, フランク王 751-768) の跡、シャルルマーニュが、768年にフランク王に就いた。フランク王位に就いたシャルルマーニュは、即、キリスト教国の安定のため、また領土拡大のため、遠征事業に乗り出した。具体的には、①ローマ法王領を脅かしていた北イタリアのロンバルディア人 (the Lombards) の討伐、②アキテーヌ (Aquitaine) への遠征、③北のデイン人、南のサラセン人の侵攻に対するキリスト教国の防衛、である。これらの業績のうち、異教徒に対して、キリスト教国を防衛、安定させたという理由で、800年、ローマ法王から、フランク王国は、西ローマ帝国の継承者として正式に認められ、シャルルマーニュは、皇帝の称号を得た。J. R. Macdonald, *A History of France*, Vol. 1, *ibid.*, p.68.
- 22) J. R. Macdonald, *A History of France*, Vol. 1, *ibid.*, p.65.
- 23) 当時ヨーロッパでは、「皇帝」と称される者は、東ローマ皇帝を指すための称号であった。当然、「皇帝」の方が、王国よりも上であった。よって、フランク王であったシャルルマーニュは、最上位のランクに位置したのであった。また、このことは、シャルルマーニュ王、すなわちカール皇帝が、キリスト教国の王として、ヨーロッパに侵入してくる異教徒の盾にならなければならない、ということの意味している。
- 24) J. R. Macdonald, *A History of France*, Vol. 1, *ibid.*, p.77.
- 25) Cf. J. R. Macdonald, *A History of France*, Vol. 1, *ibid.*, p.75.
- 26) J. R. Macdonald, *A History of France*, Vol. 1, *ibid.*, p.73.
- 27) 843年のヴェルダン条約 (Traité de Verdun) とは、ルイ1世の子供3人が、王位継

承を巡って、フランク王国の分割を約束した条約である。

- ・長男ロタール1世は、皇帝の称号を保持し、フランク王国の中央部と北イタリアを領有。具体的には、ポー川、ロヌ川、ムーズ川、モーゼル川の盆地、またライン川以西半分、シュルデ川以東半分の盆地を含むロタランジー (Lotharingie) 地域、さらにローマ、アルル、ミラノ、アーヘンの帝国都市である。このロタランジー地域が、後に問題となった。
 - ・三男ルートヴィヒ2世は、ライン川以東のドイツを含む、東フランク王国を領有。具体的には、シュバイエル、ヴォルムスの都市である。
 - ・四男シャルル1世は、西フランク王国を領有した。具体的には、ロヌ川の支流ソーヌ川まで届かなかった地域、すなわちシャロン近郊のソーヌ川を越えた地域、またムーズ川まで達しなかった地域、シュルデ川以北の地域である。
- Cf. J. R. Macdonald, A History of France, Vol. 1, ibid., pp.82-83.*
- 28) 870年のメルセン条約 (Traité de Meerssen) とは、ロタール1世の子ルートヴィヒ2世が相続したロタランジー地域の分割について、東フランク王のルートヴィヒ2世と、西フランク王のシャルル1世とが、取り決めた国境制定条約である。
- Cf. J. R. Macdonald, A History of France, Vol. 1, ibid., p.86.*
- 29) Edward James, *The Oxford Illustrated History of Medieval Europe, op. cit.*, pp.108-109.
- 30) J. R. Macdonald, *A History of France, Vol. 1, ibid.*, p.91.
- 31) John Blair, *The Oxford History of Britain, op. cit.*, p.64.
- 32) マーシア王国のオッフア王は、エセックス、ケント、サセックス、サリー (Surrey) を、征服することによって、757年から、ブレトワルダになった。オッフア王のブレトワルダは、ローマ法王から認められ、そして、当時大国であったフランク王国のシャルルマーニュ王 (カール皇帝) からは、同等の地位を認められ、通商条約を結ぶことができた。また、ウェイルズ人からイングランドの治安を守るために、オッフア王は、ウェイルズとの国境に「オッフアの防壁 (Offa's Dyke)」を建設した。
- ・Thomas Hodgkin, *The Political History of England, Vol.1, op. cit.*, p.251.
 - ・Cyril E. Robinson, *England, op. cit.*, p.19.
- 33) Thomas Hodgkin, *The Political History of England, Vol.1, op. cit.*, p.257.
- 34) Gwyn Jones, *A History of the Vikings, Second Edition, Repr. of 1968, ed.*, Oxford University Press, 1986, pp.75-6.
- 35) John Blair, *The Oxford History of Britain, op. cit.*, p.92.
- 36) Edward James, *The Oxford Illustrated History of Medieval Europe, op. cit.*, p.108.
- 37) *Cf. Gwyn Jones, A History of the Vikings, op. cit.*, p.90.
- 38) F. M. Stenton, *Anglo-Saxon England, op. cit.*, p.246.
- 39) Thomas Hodgkin, *The Political History of England, Vol.1, op. cit.*, p.275.
- 40) Gwyn Jones, *A History of the Vikings, op. cit.*, p.213.
- 41) 著者 (=川瀬) は、865年に、ケント人がデイン人に対して、支払ったお金を、身代金であるワーゲルトにした。著者 (=川瀬) が現在所有している史料の中には、このお金が、ワーゲルトであるという確固たる証拠を、見つけることができない。だが、当時の時代背景を考えると、多少なりとも、お金を保持しているものは、ケント王と、彼に従属する州裁判所だけであった。このようなことから考えて、著者 (=川瀬) は、865年に、ケントがデイン人に支払ったお金、言い換えるとケントがデイン人から、平

和を購うために支払ったお金を、身代金のワーゲルトにした。

- 42) Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol.1, *op. cit.*, p.280.
- 43) Martyn Bennett, *Illustrated History of Britain*, *op. cit.*, p.76.
- 44) デインロー (Danelaw) とは、デイン人が、8世紀末以来イングランド東部、およびフランク王国北部に、侵入、占領した地域である。そのデインロー地域内では、デイン人の法律、慣習、言語が一般的であった。言い換えれば、デイン人が、デインローといわれる地域内に住むことが許され、その地域内では、デイン人の慣習に従い、‘デイン人の法律’、すなわち ‘Danes law’ を、遵守しなければならなかった。なお、このデインローという言葉は、11世から使われ出した。Tm Wood, *The Saxons and the Normans*, Repr. of 1989, ed., Ladybird Books, 1994, p.18.
- 45) Gwyn Jones, *A History of the Vikings*, *op. cit.*, p.421.
- 46) Cf. Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol.1, *op. cit.*, p.308.
- 47) Cf. Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol.1, *ibid.*, p.308.
- 48) Cf. Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol.1, *ibid.*, p.307.
- 49) ・ John Blair, *The Oxford History of Britain*, *op. cit.*, p.95.
・ Cyril E. Robinson, *England*, *op. cit.*, p.25.
・ Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol.1, *op. cit.*, p.312.
- 50) F. M. Stenton, *Anglo-Saxon England*, *op. cit.*, p.263.
・ Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol.1, *op. cit.*, p.312.
- 51) Christopher Brooke, *The Saxon and Normans Kings*, *op. cit.*, p.104.
- 52) John Blair, *The Oxford History of Britain*, *op. cit.*, p.95.
- 53) Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol.1, *op. cit.*, p.432 and p.436.
- 54) Cf. Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol.1, *ibid.*, p.371.
- 55) Cf. John Blair, *The Oxford History of Britain*, *op. cit.*, p.106.
- 56) ・ Martyn Bennett, *Illustrated History of Britain*, *op. cit.*, p.76.
・ Cyril E. Robinson, *England*, *op. cit.*, p.32.
- 57) Cf. John Blair, *The Oxford History of Britain*, *op. cit.*, p.106.
- 58) ・ Nicholas Hooper and Matthew Bennett, *Cambridge Illustrated Atlas of Warfare : The Middle Ages 768-1487*, Cambridge University Press, 1996, p.36.
・ Gwyn Jones, *A History of the Vikings*, *op. cit.*, p.132.
- 59) Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol.1, *op. cit.*, p.379.
- 60) Ann Williams, *Kingship and Government in Pre-Conquest England c.500-1066*, Macmillan Press Ltd, 1999, p.115.
- 61) David C. Douglas and George W. Greenaway, *English Historical Documents*, Vol. 2, 1042-1189, Second Edition, Repr. of 1953 ed., Routledge: London and New York, 1996, p. 562.
- 62) Ann Williams, *Kingship and Government in Pre-Conquest England c.500-1066*, *op. cit.*, p.115.
- 63) Gwyn Jones, *A History of the Vikings*, *op. cit.*, p.365.
- 64) F. M. Stenton, *Anglo-Saxon England*, *op. cit.*, p.152, and p.152 n.1.
- 65) Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol.1, *op. cit.*, p.386.
- 66) David Hume, *The History of England*, Vol.1, from the Invasion of Julius Caesar to The Revolution in 1688, Repr. of 1778, ed., Liberty Classics, 1983, p.121.

- 67) Cf. F. M. Stenton, *Anglo-Saxon England*, *op. cit.*, pp.392-3.
- 68) Charles Oman, *A History of England*, Revised Edition, Repr. of 1902, ed., Books for Libraries Press, 1972, p.56.
- 69) Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol.1, *op. cit.*, p.455.
- 70) Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol.1, *ibid.*, p.456.
- 71) この胸に秘めてというのは、ノルマンディー公ギヨーム2世は、この約束自体が100パーセント受け入れられなかったからである。というのは、当時のイングランド王に就ける者は、ウィタン賢人評議会で、推挙された者だけがなれ、このことをノルマンディー公ギヨーム2世が、知っていたからである。言い換えると、エドワード証誓王も、ウィタン賢人評議会によって推挙され、イングランド王になったのであり、エドワード証誓王自体、イングランド王を決定する権利を、持っていなかったのである。
- 72) この告示の場面は、イングランド史の第1級の史料であるバイユーのタペストリー (La Tapisserie de Bayeux) の第1場面で見ることができる。なお、このバイユーのタペストリーは、ノルマンディー公ギヨーム2世の異母弟、バイユーの司教であるオド (Odo, c. 1030-1097) が、刺繍で制作させた歴史的ストーリーである。このバイユーの刺繍のストーリーは、58の重要場面がある。
- 73) David Hume, *The History of England*, Vol.1, *op. cit.*, p.142.
- 74) この場面は、バイユーのタペストリーの第23場面で見ることができる。
- 75) このエスネック船 (esnèque) は、11世紀から12世紀にかけて、ノルマンディーで建造されていた戦艦である。また、このエスネックという名称は、スカンディナヴィア海賊船から来ている。スカンディナヴィアの海賊船は、スカンディナヴィア語で、snekkja という。 Cf. Gwyn Jones, *A History of the Vikings*, *op. cit.*, p.189.
- 76) Cyril E. Robinson, *England*, *op. cit.*, p.47.
- 77) Cyril E. Robinson, *England*, *ibid.*, p.48.
- 78) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol.2, *The History of England from the Norman Conquest to the Death of John 1066-1216*, Edited by William Hunt, Reginald L. Poole, Repr. of 1905, ed., New York: Ams Press, Kraus Reprint Co., 1969, p.14.
- 79) Cyril E. Robinson, *England*, *op. cit.*, p.51.
- 80) Cf. Brian Golding, *Conquest and Colonisation*, *The Normans in Britain, 1066-1100*, Revised Edition, Repr. of 1994, ed., Palgrave, 2001, p.33.
- 81) Brian Golding, *Conquest and Colonisation*, *ibid.*, p.62.
- 82) Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol.3, *From Domesday Book to Magna Carta 1087-1216*, Second Edition, Edited by Sir George Clark, Repr. of 1955, ed., Oxford University Press, 1986, p.1.
- 83) Cyril E. Robinson, *England*, *op. cit.*, p.51.
- 84) Cyril E. Robinson, *England*, *ibid.*, p.50.
- 85) Cf. George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol.2, *op. cit.*, p.58.
- 86) Cf. Cyril E. Robinson, *England*, *ibid.*, p.47.
- 87) Cyril E. Robinson, *England*, *ibid.*, p.52.
- 88) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol.2, *op. cit.*, p.66.